

第17章

祛痰剤（きよたんざい）

祛痰剤は、祛痰薬を主体にし、痰を排除・消解したり、各種の痰病に効果のある方剤である。

痰は全身至らないところはなく、臟腑・経絡すべてに病変をひきおこし、症状は非常に複雑である。よくみられる症候は、咳嗽有痰・喘促・胸膈痞悶・眩暈嘔吐・癲癩・中風・痰核・瘰癧などである。

痰の成因は非常に多く、治法もそれぞれ異なる。

脾失健運で湿聚成痰した湿痰には燥湿化痰を、火熱内鬱で津液を^{しやくごう}燥熬した熱痰には清熱化痰を、肺燥陰虚の虚火灼津による燥痰には潤肺化痰を、脾腎陽虚の寒飲内停や肺寒留飲には温化寒痰（寒飲）を、肝風内動で挟痰上擾する風痰には熄風化痰を、外邪襲肺による肺失宣降で聚液生痰したときには宣肺化痰を、それぞれ使用する。以上の治法にもとづいて、祛痰剤も燥湿化痰・清熱化痰・潤燥化痰・温化寒痰・治風化痰の5つに分類される。

なお、痰とは異名同類の飲（水飲）があり、稠濁なものが痰で清稀なものが飲と区別されるが、いずれも水湿が停聚して生じる。痰は火熱の煎熬によって生成することが多く、飲は陽虚で水湿の蒸化ができないために発生することが一般的で、痰は熱証で、飲は寒証でみられることが多い。ただし、両者を明確に区分しがたい場合もあり、痰飲と総称される。

痰の生成には五臟すべてが関与するが、脾の運化と腎の蒸騰が最も深く関連し、「五臟の病は、ともによく痰を生ずるといえども、然して脾腎によらざることなし」と指摘される。それゆえ、痰の治療では、化痰だけでなく生痰の本に対する配慮が必要で、「脾は生痰の源たり、痰を治するに脾胃を理さざるは、それ治にあらざるなり」「よく痰を治するものは、ただよくこれをして生ぜしめず、まさにこれ補天の手なり」といわれる。

このほか、痰は気とともに昇降し、気が壅滞すると痰が停聚し、気が行ると痰も消散するので、祛痰剤には理気薬を配合すべきで、「よく痰を治するものは、痰を治せずして気を治す、氣順ればすなわち一身の津液もまた氣に随いて順るなり」と

指摘されている。

痰が経絡・肌腠に流注して瘰癧・痰核を形成した場合には，疏通経絡・軟堅散結などを配合する必要がある。

第1節 燥湿化痰剂（そうしつけたんざい）

燥湿化痰剂は湿痰に用いる。

湿痰は、脾陽不振のために運化が不十分になり、水湿が停聚して生じた痰である。

症候は、白色で咯出しやすい多量の痰・胸苦しい・腹満・悪心・肢体が重だるい・めまい・頭重・舌苔が白滑あるいは膩・脈が弦滑あるいは緩などを呈する。

燥湿化痰の半夏・天南星・陳皮などを主とし、健脾燥湿の蒼朮・茯苓などを配合する。

二陳湯（にちんとう）

《和剂局方》

〔組成〕 半夏9g 陳皮9g 茯苓6g 炙甘草3g

〔用法〕 生姜3g，烏梅1個とともに水煎服する。近代では、生姜・烏梅を用いないことが多い。

〔効能〕 燥湿化痰・理氣和中

〔主治〕 湿痰

咳嗽・白色で多量の痰・胸が痞えて苦しい・悪心・嘔吐・肢体が重だるい・めまい・動悸・舌苔は白滑あるいは白膩・脈は滑など。

〔病機〕 脾が健運できないために湿邪が凝聚し、氣機を阻滞し鬱積して痰を生じた状態である。

「脾は生痰の源たり、肺は貯痰の器たり」で、湿痰が肺を犯すと咳嗽・多量の咯出しやすい白色痰が、痰が氣機を阻滞し胃が和降できないと悪心・嘔吐・胸が痞えて苦しいなどが、濁陰が清陽を阻遏するとめまい・動悸が、湿が脾を困阻すると食飲不振・肢体が重だるいなどがみられる。

〔方意〕 燥湿化痰により痰湿を除き、理氣和中により脾を健運させて痰湿の発生を防止する。

主薬は半夏で、辛温で燥性であるために燥湿化痰に最も適し、さらに和胃降逆・止嘔に働く。陳皮は理氣燥湿するとともに順氣化痰し、茯苓は健脾滲湿により痰の生成を防ぎ、炙甘草は健脾を助け諸薬を調和する。生姜は降逆化飲を

補助するとともに、半夏の毒性を除く。少量の烏梅は肺気を収斂し、半夏の散とあわせると祛痰しても傷正の恐れがない。

【参 考】

- ① 原著には「痰飲患いを為し、或いは嘔吐悪心し、或いは頭眩心悸し、或いは中脘快ならず、或いは発して寒熱を為し、或いは生冷を食すに因り脾胃和せざるを治す」とある。
- ② 本方は、半夏・陳皮が陳旧のものほど効果がよいために、「二陳」と名づけられている。
- ③ 本方は湿痰に対する主方で、随症加減により他の痰証に広く用いることができる。

《医方集解》に「治痰は二陳を通用す。風痰には南星・白附・皂角・竹瀝を加う、寒痰には半夏（乾姜の誤りか）・姜汁を加う、火痰には石膏・青黛を加う、湿痰には蒼朮・白朮を加う、燥痰には栝楼・杏仁を加う、食痰には山楂・麦芽・神麴を加う、老痰には枳実・海石・芒硝を加う、氣痰には香附・枳殼を加う、脇痰の皮裏膜外にあるには白芥子を加う、四肢の痰には竹瀝を加う」と解説されている。

一般には、風痰には製南星・白附子を、寒痰には乾姜・細辛を、熱痰には栝楼・天竺黄を、食痰には萊菔子・枳実を、頑痰には青礞石・海浮石を、それぞれ加えて使用するとよい。

附 方

1. 金水六君煎（きんすいりっくんせん）《景岳全書》

組成：当帰 6g，熟地黄 6～15g，陳皮 5g，半夏 6g，茯苓 6g，炙甘草 3g。
生姜と水煎服用する。

効能：滋陰補血・除湿化痰

主治：原著に「肺腎虚寒，水泛して痰をなし，あるいは年邁^じきて陰虚し，血氣不足し，外に風寒を受け，咳嗽嘔悪し，多痰喘急等の証を治す，神効」とあり，《方剂心得十講》によれば「本方は二陳湯に当帰を加えて和血養血して心肺を益し，熟地黄を加えて腎水を滋して肺金を潤す。またこれは六君子湯から人参・白朮を去り，当帰・熟地黄を加えたことから金水六君煎の名がある。滋陰するとともに化痰し，痰盛咳嘔を治療して肺腎を傷害することがなく，効果も優れる。六君子湯は脾虚で痰濁壅盛を化せず嘔逆腹泄などの症状を呈するものに用い，金水六君煎は肺腎両虚で痰濁が内盛し咳嗽多痰の証に用いる。脾虚多湿で大便がすっきりでなければ当帰を去って炒山薬 9～15g を加え，痰盛氣滯で胸膜がすっきりしなければ白芥子 3g を加え，陰寒内盛で咳嗽が治まらず白い薄い痰をはくなら，細辛 3g を加え，同時に寒邪が半表半裏

にあつて寒熱往来があれば、柴胡6～9gを加えるとよい」と説明している。

2. 加味二陳湯（かみにちんとう）《沈氏尊生書・婦科玉尺》

組成：当帰6g，川芎3g，茯苓・陳皮・半夏各9g，炙甘草3g。水煎服。

効能：除湿化痰・調経

主治：痰湿内盛による月経周期延長・経血が淡色で粘稠・多量の白色帯下・舌苔が白膩など。

痰湿内盛下注により衝任が阻滯され、月経後期（周期の延長）・経血淡色で粘稠・白帯などがみられる。二陳湯と活血調経の当帰・川芎の配合により、痰湿を除き調経する。

原著には「経水期を過ぎ色淡なるものは痰なり、宜しく二陳湯加川芎・当帰とすべし」とある。

3. 理痰湯（りたんとう）《医学衷中参西録》

組成：芡実30g，半夏12g，黑芝麻（炒して搗く）9g，柏子仁（炒して搗く）9g，白芍6g，陳皮6g，茯苓6g。水煎服。癩癧には代赭石9gを加える。

効能：理気化痰・補腎利水・鎮衝降逆

主治：「痰が胸膈に鬱塞し満悶短気するものを治す」。

痰は肺中にたまると喘促咳逆し、心下に停まると驚悸不眠、胃口に滞れば脹満・吐き気・げっぷになり、経絡に溢れると肢体麻木（知覚麻痺）や偏枯（片麻痺）、関節に留まり筋骨に着すと俯仰しづらく牽引痛、逆気に随って肝火が上昇すれば眩暈で座することも立つこともできなくなる。

張錫純によれば、治痰の代表方剤とされる二陳湯は標治の方剤であつて本治はできない。痰の標は胃に在るが、痰の本はもともと腎に在る。

方剤は君薬の半夏で衝気・胃気の逆を降す。大量の芡実で衝気を収斂し、さらに腎気を収斂してその閉蔵の力を増強する。腎の気化が治まれば、膀胱と衝脈の気化は自然に治まるので、痰の根本は除かれる。黒脂麻・柏子仁は、半夏の燥を潤しかつ芡実を助けて補腎する。芍薬・茯苓は、一つは滋陰して利小便し、一つは淡滲して利小便する。陳皮は、化痰ではなくじつは行気が目的で、半夏を佐として逆気を降しかつ芡実・黒脂麻・柏子仁の滯膩を行らす。

4. 竜蟠理痰湯（りゅうもうりたんとう）《医学衷中参西録》

組成：清半夏12g，生竜骨（細かく搗く）18g，生牡蛎（細かく搗く）18g，生代赭石（細かく挽く）9g，朴硝6g，黒脂麻（炒して搗く）9g，生白芍9g，陳皮6g，茯苓6g。

効能：寧心固腎・補虚安神・清熱化痰

主治：「思慮して痰を生じ、痰によって熱を生じ神志不寧になるもの」を治す。

本方は理痰湯の芡実を竜骨・牡蛎に代え、さらに代赭石・朴硝を加えた。加減の理由は、本方が主る痰は、虚であって実を兼ねるためである。実痰は開くべきで礞石滾痰丸の芒硝・大黃がこれである。虚痰は補すべきで、腎虚汎の虚痰を腎気丸で駆逐するのがこれである。虚に実を兼ねた痰の場合は、一葉で開痰かつ補虚する、本方の竜骨・牡蛎がこれである。心腎は相互扶助の関係にあり、心腎が相互に病めば、思慮がますます多くなり熱熾液凝して痰が壅滞する。方中では芡実に代えて寧心固腎・安神清熱に働く竜骨・牡蛎を用いる。強固な痰にたいし、さらに代赭石・朴硝を加え、痰を引いて下行させて除く。

5. 理飲湯（りいんとう）《医学衷中参西録》

組成：白朮 12g、乾姜 15g、桂枝尖 6g、炙甘草 6g、茯苓 6g、白芍 6g、陳皮 4.5g、厚朴 4.5g。水煎服。数剤を服用後、症状に改善がみられても気分不足があれば、生黄耆 5～10g を適宜加える。

効能：扶陽心肺・健脾祛湿

主治：「心肺陽虚に因り、脾湿不昇、胃鬱不降を致し、飲食は運化する能わずして精微変じて飲邪となり、胃口に停まり満悶し、膈上に溢して短気し、肺竅に漬満して喘促し、咽喉に滞膩して粘涎を咳吐するものを治す」とある。甚だしいと鬱熱、身熱、耳聾があらわれる。必ず脈が弦遅細弱であることを確認してから本方を投与すると注釈がある。

脾胃の昇降が正常なら昇清降濁が行われて痰飲が生じることはないが、心肺陽虚では、陽不足で運化・伝送ができないので飲食が胃口に停滞する。方中の桂枝・乾姜で心肺の陽を助けてこれを宣通し、白朮・茯苓・甘草で脾胃の湿を理してこれを淡滲し（茯苓・甘草を同時に用いると湿満を最も瀉す）、厚朴は、葉天士が「厚朴は多く用いれば則ち破気、少なく用いれば則ち通陽」と述べる如く、その温通の性質で胃中の陽を通じ降気して水穀を下行し；橘紅（陳皮）は白朮・茯苓・甘草を助けて痰飲を利す。白芍は、その苦平の性で（平は降を主る）熱薬の上僭を防ぎ、酸斂の性で虚火の浮游を制す（《本経》では芍薬は苦平であるが、後世芍薬は酸斂といい、実際の味は苦でわずかに酸味がある）。さらに薬が熱性であると脾胃にはよいが、肝胆にはよくない恐れがある。芍薬は涼潤の性質で、肝胆の陰を滋して、肝胆の熱を予防しうる。また芍薬はよく小便を利し、小便が利せば痰飲は減少する。

三子養親湯（さんしようしんとう）

（別名：三子湯）《韓氏医通》

〔組成〕 白芥子 6g 蘇子 9g 萊菔子 9g

〔用法〕 三葉を搗き碎き布で包んで水煎し、頻回に服用する。

〔効能〕 降気快膈・化痰消食

〔主治〕 痰壅気逆

咳嗽・呼吸困難・多痰・胸が痞える・少食・消化が悪い・舌苔は白膩・脈は滑など。

〔病機〕 中気虚弱で運化が失調し、停食・生湿により痰が生じ、痰壅気滞のために肺が肅降できなくなって喘咳を生じた状態である。

肺気が壅滞上逆するので、咳嗽・呼吸困難・胸が痞えるなどが生じる。壅滞した痰が咳とともに多量に喀出されるが、完全に排痰されることがなく、さらに新たに産生される。中気虚弱のために少食・消化が悪い・胸の痞えなどをとれない、舌苔が白膩・脈が滑は痰湿をあらわしている。

〔方意〕 順気降逆するとともに消食化痰する。

白芥子は温肺利気・快膈消痰に、蘇子は降気行痰・止咳平喘に、萊菔子は消食導滯・行気祛痰に働く。3葉はともに行気祛痰の効能をもち、順気降逆・止咳平喘・消食化痰・寛膈の効果をあげる。

〔参考〕

①《成方便読》には「それ痰の生ずるや、あるいは津液の化する所により、あるいは水飲の成す所により、然してまた食によりて化するものあり。みな脾運失常により、もって食する所の物、精微に化さずして化して痰をなすを致す。然して痰壅^{ふさが}ればすなわち気滞り、気滞ればすなわち肺気は下行の令を失し、これにより咳嗽をなし喘逆をなすなどの証あり。病は食積によりて起こる、故に方中は萊菔子をもって消食行痰す。痰壅^{ふさが}ればすなわち気滞る、蘇子をもって降気行痰す。気滞ればすなわち膈^{ふさが}塞る、白芥子にて暢膈行痰す。三者みな治痰の薬にして、またよく治痰の中に各その長を^{たくまし}遅くす。食消え気順れば、喘咳自ずと寧んじて、諸証は自ずと癒え、また用うる者の宜を得る」と解説している。

3葉は症状に応じて用量を変化させるのがよく、降気にすぐれた蘇子は喘咳に、快膈消痰にすぐれた白芥子は胸膈痞塞・多痰に、消食に長じた萊菔子は食少痞満に、それぞれ主薬として用いる。

② 本方は元来「老人の気実痰盛」に対して設けられているが、中虚の運化失調に広く使用してよい。ただし、痰が除去されて症候が改善されたのちは、痰の再発を防止するために健脾祛痰の方剤で本治すべきである。